

神長倉歴史学の魅力

—補説『会社という言葉』(3)—

馬 場 宏 二

「会社」の語義語源を探索する¹⁾中で思いがけぬ体験をした。この語に関わる人物の経歴や個性に関心が湧いて来たのである。我ながら予想外だった。もともと経済学専攻で、歴史家として訓練を受けたことはない。文学に対する関心も、若いころに文学青年かぶれをやらかした経験がわずかにある程度に過ぎない。特定個人に対する関心は少ない方だと思っていたのに、いささか変わったらしかった。対象が言葉だったせいもあるだろうが、『資本論』との関わりで新渡戸稲造や夏目漱石を取り上げた経験²⁾が契機となったのかも知れない。

「会社」探索の中で、もう少し知りたくなかった人物は何人か現れた。「商社」を最初に使ったと覚しき岡部駿河守長常、標準的な研究書や大辞書で、会社概念の導入者・「商社」の邦訳者と目される小栗上野介忠順、その友人であり時代に対する深い洞察者だった栗本鋤雲、「商人会社」の福沢諭吉、幕末の蘭学者として「会社」の語を普及させたと見られる杉田玄端や古賀増、時代はやや下るが、小栗に関わって「コンパニー」の由来を鮮やかに指摘してみせた神長倉真民。

これらのうち、福沢については自分なりに掘り下げてみた³⁾。蘭学者については筆者の出る幕はない。おそらく蘭学史家が多く知識を貯えており、筆者が先行業績を知らないだけであろう。栗本鋤雲についてはそもそも政治史家⁴⁾から学んだのである。この分野で多くの研究が蓄積されているであろう。岡部駿河は一番知りたい一人だったが、灯台下暗しとはこのことで、実は同じ大学の兵頭徹氏が研究を進めていた⁵⁾。その後の探索を含めて、関心は神長倉真民に収斂した。実は「会社」論史で最重要なのはやはり小栗上野介なのだが、小栗については史料の決定的な欠如があり、どこまで詰めても伝記小説以上の人物史は出来そうにない。そして、小栗像の解釈や史料の欠如についても、管見の限り神長倉真民が最も新鮮かつ適切な見解を述べていたのである。

1. 神長倉真民の謎

神長倉真民は不思議な存在である。処女作『閩族の解剖』に横山柳村が寄せた跋文によると、天野博士の推薦で日銀に入り、しばらく後辞めて、雑誌『ニコニコ』⁶⁾や『義勇青年』⁷⁾に関わった。前誌の1913年の巻に署名入り記事がある。後誌は1915年創刊で、神長倉は理事で印刷人で多数の記事を書いているから、彼が創刊した雑誌であろう。横山も寄稿しているが、この雑誌は短期間で潰れたようである。さて神長倉はこの後1924年に『ダイヤモンド』誌に入り⁸⁾、1938年ま

では記者として書いていたらしい。彼は生涯で10冊余りの本を出した。

そこまでは何とか判る。ところがそれ以上となると、生没年や出生地・出身学校さえ判らない。せいぜい、出生地は福島県浪江町か⁹⁾、出身校は早稲田実業学校か、と推測出来る程度である¹⁰⁾。人名辞典・著者名辞典・人事興信録の類にも名がない。唯一掲載されているのが近年刊行の『増補著名人名辞典』¹¹⁾だが、これにも生没年等は記載がなく、しかも名を「かなくらまたみ」と読んでいる。生前唯一公表した読みは、『明治産業発生史』の奥付けの「かなくらまさみ」である。NACSIS-Webcat や東大 OPAC では「まさみ」と読んでいる。

当面最大の確実な情報源は著書一覧である。それを出版年順に掲げる。

神長倉真民著作一覧

- 『閥族の解剖』 大正6(1917)年 四方社
- 『サイエンテフィック・マネージメントの研究』 大正10(1921)年 早稲田実業学校
- 『科学的に研究した執務能率増進法』 大正13(1924)年 大日本能率増進研究所
- 『執務能率講話』 大正13(1924)年 大日本能率増進研究所
- 『事務能率の研究』 大正13(1924)年 工業教育会
- 『事務能率の研究2』 大正13(1924)年 工業教育会
- 『能率学講話』 大正14(1925)年 大日本能率研究所
- 『米国の金融市場』 昭和4(1929)年 ダイヤモンド社
- 『財界巡礼記』 昭和5(1930)年 千倉書房
- 『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』 昭和10(1935)年 ダイヤモンド社 (幕末経済秘史)
- 『明治産業発生史』 昭和11(1936)年 ダイヤモンド社
- 『新興コンツェルン物語』 昭和14(1939)年 ダイヤモンド社 (ダイヤモンド文庫)
- 『明治維新財政経済史考』 昭和18(1943)年 東邦社

細部不明のままに概括すると、『閥族の解剖』は経験ある独立ジャーナリストの著書、その後神長倉は労働能率論に集中する。第一次世界大戦を機に日本産業界でアメリカ流労務管理論が流行した状況に即応したのであろう。あるいは自らその先駆だったか？その過程で彼は雑誌『ダイヤモンド』に入る。『米国の金融市場』と『財界巡礼記』は『同誌記者になってからの著作だが、前著は事実上翻訳、後著は紡績業を中心とした時論ながら魅力ある独立出版物である。『新興コンツェルン物語』は『ダイヤモンド』1938年に無署名で特集的に載せたいくつもの「…コンツェルンの研究」を纏めて著書にしたもの。この後同誌に神長倉の名や彼の筆を推測させる記事は登場しなくなる。『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』、『明治産業発生史』、『明治維新財政経済史考』の三作は、新興コンツェルン研究より前の時期に「芋作」のペンネームで「維新経済史抜読み」を連載し始め、単発の産業史いくつかで間を埋めながら、「神長倉生」の名による「維新経済秘史」に繋げていった歴史ものを、大幅に手を入れて本に纏めたものである。

『ダイヤモンド』誌の1933年初以降、芋作は「維新経済史抜読み」を、八つあん熊さん相手に横町の隠居が語るスタイルで、殆ど毎号掲載した。ところがこれだけでは筆力が余ったと見えて、1935年になると抜読みの他に、神長倉生の名で「万華鏡」,「明治開化前史」と三本連載したりする。「万華鏡」では小栗上野介を巡って蜷川新を史料操作の粗雑さを中心に繰り返し批判し¹²⁾, 同じシリーズで天皇機関説攻撃を書き¹³⁾, また別に慶応四年の神戸事件の史実と解釈を巡って作家の長谷川伸と論争している¹⁴⁾。わずかな随筆を除けばこの他の署名記事はなさそうだが、無署名記事や別名記事の有無は筆者には判らない。しかし、『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』の出版に関わる社内記事¹⁵⁾で、同僚の若手記者が「神長倉氏」と敬称し、駆け出しの頃から『日本外史』を読めと教えられたと感謝しているから、長老記者として自由に書けるようになってから、念願の歴史ものを書きたい放題に書き、自社出版したと見てよさそうである。

ところで神長倉の謎はまだ続く。具体的な内容は次節以下で示すが、彼の幕末維新論は魅力に満ちている。通説を覆す爽快さがあり、それも単なる異説の提示に留まらず、史料批判や新史料提示を踏まえた新説登場といった趣がある。だがそれにもかかわらず、神長倉真民は歴史学界でまともな扱いを受けた気配がない。人名辞典や著者名辞典類に全く現れないのはそのせいかも知れない。管見の限りで、神長倉の名を明記した歴史学の研究文献は、彼が岸川家文書第3号を引用したことに触れた二作しかない¹⁶⁾。もとより筆者は歴史学者ではないから、文献を網羅的に知っているわけではないし、読んで忘れた場合があるだろうから、これしかないと断言はできない¹⁷⁾。しかし、神長倉から受ける印象に比べると引用数が異様に少ないことは事実である。『ダイヤモンド』の若手記者は、尾佐竹猛や竹越与三郎が書を寄せて神長倉の仕事をホメたと記していたが¹⁸⁾, 同時代のアカデミックな歴史家達は、専門家的視野狭窄のせい、学界史家の在野史家に対する蔑視のせい、あるいはおりからの日本資本主義論争に気を奪われたせい、神長倉を完全無視したようである。

その傍証にもなる事実だが、筆者が神長倉に気づいて後問い合わせた現役の歴史家達、経済史を中心に政治史も社会史も含み15人を越える、それぞれに当代一流と呼んで良い歴史家達は、誰一人神長倉の名を知らなかった¹⁹⁾。ただ一人博識をもって鳴る、経済学史界の大長老が『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』の書名だけを知っていた。つまり、幕末維新史について、史料に基づいて新鮮かつ刺激的な発言を次々と繰り広げた神長倉は、当時も今も、歴史学界からは徹底的に無視され続けているのである。神長倉真民の謎とはこのことに他ならない。

2. 小手調べ—神長倉の鮮度

以下試みに、『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』やその下敷きになった「維新経済史抜読み」に含まれる神長倉の発言から、筆者に強い印象を残した論点中のいくつかを拾ってみる。無論、日本史にはシロウトだから、専門家には常識になっている水準の刺激に驚いてしまった怖れはある。だが、専門家達がこのどれかに、改めて新鮮な刺激を受けるとすれば、歴史学界がこれまで

神長倉を完全無視して来たのは怠慢だと謗られても抗弁できまい²⁰⁾。

1. 幕末訪欧諸使節の真の目的。文久元年竹内使節団の訪欧目的は、表向き三市開港延期の交渉だが、実は東禅寺夜討ち事件に対する対英謝罪であり、開港5カ年延期は纏まったが、関税率を5%に下げさせられた²¹⁾。文久三年の池田使節団も、表向きは鎖港談判だが実は井土ヶ谷事件に対する対仏謝罪であり、使節団は幕仏攻守同盟を結んで帰り有益な外国事情紹介もしたのに、全く筋の通らない処罰を受けた²²⁾。攘夷派が横暴な時代だったから真の目的は公表できなかったのだが近年外国側の資料が現れた結果判るようになった。慶応三年の徳川昭武訪欧の隠された目的は借款交渉だと解されがちだが、最後まで秘められた栗本鋤雲訪仏の目的がそれにかかわるものだった…諸使節外遊譚は、尾佐竹猛が珍談奇談を主に纏めて書いている²³⁾が、同書にはこの種の深刻な裏話はない。こうした説の真偽を、その後の歴史学はどこまで確かめたのだろうか。
2. 勝・西郷会見の場所²⁴⁾。史料批判中の白眉である。江戸城開渡しの談判に両者が会見したのは、勝の『海舟日記』を根拠に高輪の薩摩屋敷（現品川駅前、高輪3—13）とするのが常識だが、実は田町の薩州蔵屋敷である。そのことは西郷の手紙から判り、勝の『氷川清話』で裏づけられる。…田町駅前の蔵屋敷跡、芝5—33に、本芝町会昭和29年建立の西郷・勝会見記念碑がある。神長倉が常識を揺るがしたのか？そうでなくともこの史料批判は、膨大な手記回顧史料を残し、晩年には歴史書をいくつか著して、幕末維新史の標準的理解の源泉となっている勝海舟が、やはり自己正当化を行なっていて、歴史理解を偏らせる源泉にもなっていたのではないかとの疑念を喚起する契機になる。以下の2点がそれに続く。
3. 会見は勝が単身で乗り込んだか。勝の手記では一人で行ったことになるが、実は山岡鉄舟が同行した。それは両者会見前に山岡が静岡へ行って西郷と事前交渉をしていることを考えれば極く自然のことである。山岡は功を誇らない人物なので、自分の手記には同行を明示しなかった。勝は逆に功を誇りたがった²⁵⁾。
4. 西郷が江戸武力攻撃を止めた理由。勝の手記では会見の結果西郷が勝の説得に従って攻撃を止めた。これは今日でも標準的理解である。だが神長倉いわく、近年諸外国で現れた資料によれば、西郷はイギリス公使パークスの反対によって武力行使を取り止めた。パークスはまた、在日フランス軍勢力が強いことを考慮して、イギリスが薩長側に加担した形になることを怖れた²⁶⁾。…パークス抑止説は明治末には吉田東伍が唱え²⁷⁾、大正期に尾佐竹猛がこれを支持していた²⁸⁾。だが勝西郷協調美談は消えなかった。神長倉がこれを書いたのは1933年である。外国資料の吸収力²⁹⁾と理解の方向づけの良さは注目して良いであろう。
5. 小栗戦略の立案者。神長倉は一般に維新を英仏対立の視点から見ようとしており、フランスの幕府への食い込みを詳しく述べている。幕府が討幕軍を迎え撃つ戦略として小栗が残した、江戸へ無血入場させておいて多勢の幕軍で包囲し、優勢な海軍力を使って補給路を断つという戦略は、大村益次郎を戦慄させたと伝えられ、小栗ファンからは小栗の軍才の現れと讃えられるが、神長倉はこれを、三兵伝習のために来日していたフランス士官の構想で、そ

もそも慶応三年末の薩摩屋敷砲撃がブリューネの計画だったことは資料が残っている。討幕軍迎撃戦略の直接の資料はないが間接の資料ならあり、シャノアンかブリューネの構想であると指摘する³⁰⁾。…資料が挙げてあるから、追跡調査が可能はずである。

6. フランス軍人の義侠心。神長倉は来日したフランス人が結構幕府に忠誠だったと指摘する。モンブランのように、裏切ってパリ万博で幕府の地位を貶めるよう振舞ったものもあり、忠誠だった高官連も私腹を肥やす機会として利用するのが当然だったが、ラシャメンと呼ばれた女性に尽されて情が移った場合³¹⁾もあり、真実幕府のために戦ったものもいた。函館に脱走した榎本の海軍が宮古湾を攻めて、これは結局失敗したのだが、自ら志願してこの危険な企てに加わったフランス海軍軍人が三人はいた³²⁾。

7. 幕府財政資料の焼却。神長倉は幕末財政史の実情が判らないのはこのせいではないかと言う。「嘘か本当か知らないが」との断わり付きだが、江戸城明け渡しに際して幕府は、財政記録を、本所の御竹蔵（現墨田区横網町、両国駅前国技館周辺一帯）で焼いてしまったと言われている³³⁾と述べる。横浜の運上所で三日かかって書類を焼いた事実があるから「或いは本当かも知れない。」と。これは小栗の資料がないという文脈で出てくる指摘だが、慶応年間に殆ど継続的に勘定奉行に就いていた人物について、今日なお肝腎なところが全く判らない最大の理由はこれだったかも知れない。神長倉は、小栗はよほど筆無精だったと見えて他に何も書いたものを残してないと注釈している³⁴⁾が、それは誤りで、かろうじて残った日記二冊と家計簿四冊は、極めて達筆・簡潔・几帳面に書き続けられている。この小栗直筆の文書は、戦前には秘匿されていた³⁵⁾から、神長倉が判断を誤ったのも無理はないが、他の文章は彼が上州権田村で斬首された時に、意図的に破壊されたと見て良いのである。さて御竹蔵での焼却が事実なら、小栗資料欠如の半分はこれで説明できる。今日の小栗研究は、当然こちらの資料破壊と、それを一部補う岸川家文書も考慮に入れるべきである。無論、小栗の消息よりもっと大きいのは、幕末財政史が判らなくなったことである。言われてみればなるほど、われわれも幕末財政史をきちんと知らずに来た³⁶⁾。

以上は印象に残った論点を取り敢えず選んだものに過ぎず、なおいくつも選び出せるし、専門家なら別の論点に感応するかも知れない。逆に、神長倉の叙述が漫談調なので、それだけで無視したくなる研究者が出るかも知れない。口調だけではない。全体に放談の趣があり、一度出た問題がいつまでも論じられないことや同じことの評価が文脈によってフレる場合もある。函館にいたカトリックの僧正メルモッチなどと、おそらくメルメ・ドウ・カシオンを誰かが誤記したのをそのまま受け取って別人扱いしてしまったらしい誤り³⁷⁾もある。アカデミック・スタイルに拘われればこういうところは大きな減点になるし、ラシャメンについての蘊蓄などはなくもがたと軽視されるかも知れない。また彼は鋭敏なジャーナリストとして時流迎合—むしろ時流先取り—的なところがあり、それは歴史分析にはさほど影響していないのだが、それ自身を皇国史観として減点要因にしたくなる歴史家もいるだろう。さらに、長谷川伸に対する場合はまだしも、蜷川新に対する論争の場合などは、大筋正しいにしても行過ぎになるほど高飛車な決めつけをしており、

さらにまた、全体として英語は相当達者らしいが、フランス語の基礎を学んでいない気配があるから、学界学者の基礎的要件だった旧制高等学校教育を受けていないことが判る。専門家から視野外に置かれた原因は、案外こうしたところにあったかも知れない。とは言え、以上の小手調べに、今日なお考慮すべき問題提起が含まれていたとしたら、神長倉真民は、かくも完全無視されてよい論客ではない。そして特に、商社構想の起源と6百万弗借款問題との相関する問題の分析は、今日なお重要な意味を持つものと思われる。

3. 商社構想の起源

これが本稿の中心課題なので、形を整えるには最後に持って行きたいところだが、事態の推移が商社構想→6百万弗借款問題の順なので、先に取り上げる。ひとまず、筆者の認識、拙著『会社という言葉』執筆過程で捉えた用語史的事実を要約する。

「会社」の文字は漢籍古典にはなく、19世紀初頭に日本の蘭学者が、不慣れな西歐的制度をオランダ語から邦訳するに際して創案した。この語は蘭学者の間では営利企業の意味を含まず、学芸技能の同好者・同業者集団の意味で使われた。幕末開港後、開明派の幕府官僚が、日本側でも商人に共同出資の大貿易企業を造らせようとし、VOCの後継社 *Nederlandsche Handelmaatschappij* を念頭に置いて、漢語的な「商社」あるいは和語的な「組合商法」の訳語を当てた。こちらは後に語義が共同出資企業一般に広がって行くが、しばらくは「会社」と「商社」が相互に独立に併存する。両者の用例が交錯するのは慶応年間に入ってからであるが、維新後には明治政府が「会社」を法定することで、一般化しかけていた「商社」を非公式化した。

拙著は用語史探究が主眼だったので、施策の現実や社会的実態の掘り下げは最低限に留めたが、それでもいくつか興味深い史実が現れた。慶応三（1867）年四月に、勘定奉行連名の「兵庫開港に付商社取立方並御用金見込の議申し上げ候書付」が提出された。この文書は、最初の商社設立構想として有名だが、厳密に言えば二度目であり、しかも主目的は兵庫開港費用を商人に拠出させることであって、商社はその手段に過ぎないのだった。とは言えそこに、商社^{カヘシヤ}の文字が含まれ、それを受けて兵庫商社が実際に設立されたから、慶応三年を日本における会社企業発足の年と言って良い。このことは、この領域での標準的学術書である管野和太郎『日本会社企業発生史の研究』で定式化され、定説となった³⁸⁾。

だが、管野はそこから遡行して幕末外遊者による会社概念の獲得を論じており、その筆頭が小栗上野介である³⁹⁾。ところが管野は、慶応三年の文書を明示しただけで小栗が帰国後すぐ商社設立を主張したかに短絡気味に語り、帰国の文久元年と上申書の慶応三年を繋ぐ史実として、『徳川慶喜公伝』の、慶応元年の文書に関わる記述を指示するにとどまった。そして小栗が訪米時に会社概念を得た証拠として挙げるのが蜷川新『維新前後の政争と小栗上野介の死』⁴⁰⁾の商社への言及だが、この書は蜷川が義理の叔父の冤罪のために書いた意図が強く、小栗の功績を過大表現している危険があり、しかも資料出所の記述が殆どないので、せっかくの労作ながら主張の

客観性を追認できない。小栗自身の訪米記が全く残されていないため、訪米の萬延元（1860）年に小栗が会社概念を獲得していたか否かは判断できないのである。せいぜいが、後に彼が改めて会社概念に触れた時に、それを素早く理解する手がかりを得たと言える程度に留まる⁴¹⁾。

実際、帰国後小栗が会社や商社を積極的に論じ始めるのは、慶応年間に入って彼が勘定奉行を続け、フランス公使レオン・ロッシュ（幕名ロセス）が、通訳カション—旧知栗本瀬兵衛—親友小栗忠順の線を通じて接触して来てからである。無論史料欠如著しい小栗のことだから、この間に彼が会社制度について世に全く宣伝推奨していないとまでは断定できないし、彼の奉行職が外交軍事治安方面だったので、持てる会社概念を発揮する機会がなかったと頑張ることも可能である。しかし、勘定奉行時代の強力な推進ぶりに比べるとその前の空白は著しく、やはり帰国後しばらくして改めて会社概念に接したと解するのが素直であろう。

以上が『会社という言葉』の中で筆者が示した認識の大筋だったが、同書執筆中に、いくつかの研究文献の比較から、先の慶応三年の上申書の前に、慶応元（1865）年に、組合商法の名で商社に關説した上申書があったことに気付いた。それが同年八月の「組合商法之儀に付御内慮奉伺候書付」であった。実はこれこそ、幕府による会社企業設立構想の端緒だったのだが、これまでそれに言及した諸研究が妙に腰の引けた不正確な紹介しかせず、組合商売か商社か用語すら食い違ふが多かったので、文書の名称や所在を捉えるのに結構労力を要した⁴²⁾。そして、一旦捉えて見ると、この構想がもともとロッシュ提案の、日仏共同生糸貿易独占企業案⁴³⁾であることが見え、やがて、これ自体ばかりか後の商社に対してもイギリス公使が一貫して強硬に反対していたことまで判り⁴⁴⁾、そこから幕末の日本が、イギリスの自由貿易帝国主義とナポレオン三世の再生フランス帝国主義との闘ぎ合いの場であって、詰まるところは、劣勢・後来のゆえに好条件を提示して浸透したフランス帝国主義に依拠した幕府が、最強傲慢のイギリスに対して、無謀にも仕掛けた攘夷戦に負けてのちスリ寄った薩摩長州に、敗れたのも当然だったかといった感想さえ持つに至った。

迂闊ながらその時点では神長倉真民の存在に全く気付かなかった。同書出版後に、岸川家文書を紹介した金井円の論文⁴⁵⁾によって神長倉の名を知り、魅かれて『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』を読んで新鮮な衝撃を受け、同書に既に、会社構想がロッシュ由来であることが示唆されていたが、神長倉に興味を引かれて著作を探索した結果、『明治産業発生史』があり、そこに「コンペニーの由来」が一章纏められていることを知った。驚いたことに、神長倉は筆者より65年前に、慶応元年の文書について、筆者よりはるかに明確に掴んでいた。特に、それが、外交文書を多く含む川勝家文書中に置かれていたために、経済史家達が気付く難かったという指摘と、この文書から会社構想がロッシュ由来小栗経由であることを鮮やかに捉えていたのには驚かされた⁴⁶⁾。筆者が用語史に拘わっていたため、辛うじてこの文書を見付け、その中に「組合商法」の文字を見出したことだけで満足してしまったせいもあるが、それまでにこの文書を検討していた管野和太郎、大塚武松、石井孝ら、維新経済史の国際的領域を開拓した一流の歴史家が、誰一人ここまで明快な把握を示していなかったからである。強いて言えば石井が臆病なほど慎重にそ

の方向を示唆していた⁴⁷⁾。筆者自身、石井の把握から飛躍して上記の把握を明示することにはささか躊躇したほどだった。しかし神長倉はこうした鮮やかな把握を、はるか以前に明示していたのである。こうなっては、シテヤラレタ！でさえない。むしろ、オレは歴史のシロウトでいて良かったナと思っただけである。

ここで念のために、慶応元年の文書全文を掲げておく⁴⁸⁾。

組合商法之儀に付御内慮奉伺候書付

御勘定奉行／同吟味役

此程御用にて上野介横浜表へ出張之節仏蘭西公使より組合商法相立候はば自分密商等之弊も薄く御取締も相立双方国益も不少加之右の商法相立候得は方今居留各人の内身元薄の者は追々退去仕巨商而已在留仕候様相成随て運上所取向を始め波戸場改方等に至迄手数も相減目今の如く多人数役々等被差置候にも不及様成行可申趣申立候に付尚評議仕候處欧羅巴各国何れも強国の分は右商法相立居候哉に承知仕且は内実政府にて輸出品の懸引も自由に出来可申趣に付左候得は当分横浜の様子にては何分御取締も不宜既に蚕卵紙之如く最前運上にて取扱品遂に外品物同様勝手の売買と相成候も其原因は奸商より醸し候事故此上何様督責仕り候えども十分之御取締相立候見据も無之傍右組合商法取立候はば可然哉と奉存候尤右の趣御採用之儀にも候はば御沙汰次第其段ロセスより仏蘭西外国事務執政に委曲申遣候間私共よりも兼て御頼相成居候同国フロリヘラルドに右之趣書翰にて申遣呉候様申聞候に付其通取計候方可然哉奉存候に付右仕方大略別紙に認取り此段御内慮奉伺候以上

丑八月

松平備中守／小栗上野介／増田作衛右門／星野録三郎

組合商法大略書

譬へば我国巨商五六人仏国巨商五六人にて交易組合を立双方規則書為取替我国商人パリスに居留仏人一人横浜に在留にて時々双方之相場飛脚船を適合利益可有之諸品彼我商人組合之者にて出金之上買入彼国に遣し四カ月後に仕切相立損益とも平等に割合仏国より差越候品も同様に割合候趣尤巨細之儀は猶取調之上談可仕趣に御坐候以上

フランス公使ロセス（ロッシュ）が、勘定奉行小栗上野介に直接に提案した、日仏双方で巨商数名ずつによる共同出資の組合商法＝商社を作り、二国間貿易を支配しようという構想である。商社組織一般の提案ではなく、二国間貿易商社を造ろうと言うのである。ロッシュは小栗に、ヨーロッパ列強は皆こうやっていると語ったようにも解せるが、フランス人なら当然こう考えるのか、実際にその種の組織が普及していたのか⁴⁹⁾。ともかくこれが、単に近代的企業組織を作れと言う忠告ではなく、当時のフランスが必要とした日本生糸の独占的輸入を容易にする、フランス国益に即した構想であったことは事実である。もっとも、商社構想一般だけなら、幕府も萬延年間にはオランダに即して掴み初めていた⁵⁰⁾から、元治年間になって来日したロッシュが改

めて説教するまでもなかったろう。国益に関わる規模の商社が、放置したのでは作れそうにない日本で、商社を現実に発足させるには、こうした生臭味あるお節介な外圧が必要だったのかも知れない。

この提案だけでは、6百万弗借款と商社はすぐには繋がらない。しかし、生糸貿易が横須賀製鉄所建設の資金源として考えられていたことは『横須賀海軍船廠史』にあり⁵¹⁾、学界の常識になっている。総工費240萬弗、60萬弗4カ年払い、生糸専売の利益によって支払うとする、ロッシュの構想である。この提案があったのが元治二(1865)年旧正月末。この年は四月に慶応元年と改元されるが、先ほどの組合商法の提案は同年八月である。

ところが、この日仏生糸専売商社構想は、各国公使の反対によって潰れた⁵²⁾。オランダ公使が最強硬だったとされるが、裏でイギリスの意向が働いていたであろう。それはともかく、この構想が潰れると、フランスの対日政策の目玉である横須賀製鉄所建設の資金源がなくなる。そこで—これから先が神長倉の独壇場なのだが—ロッシュが、これを含め、長州征伐の経費も含めて、計6百万弗の借款構想を提示したのだろう、となる⁵³⁾。

6百万弗借款は結局成立しなかったのだし、われわれの主目的からすれば、商社構想との関連が示しておければ済む。注目すべきは、神長倉が、商社構想の出現をかような文脈において捉えた筋の良い歴史眼と、その際「組合商法…」の文書を『川勝家文書』の中から見出していた⁵⁴⁾慧眼とを兼ね備えていたことである。あるいは両者は重なっていたのかも知れない。歴史文脈の把握がなければ「組合商法…」の文書を見出す必要もなかったし、文書の発見によって歴史文脈—英仏帝国主義対立の中での、後発フランスの幕府への食い込み—が一層明確になったであろうからだ。

4. 6百万弗借款問題

フランスから6百万弗を借り入れて幕府の武力を強化し、反抗する長州薩摩を押さえ込んで、徳川中心の郡県制を敷こうという構想があったことは幕末史に見え隠れする。勝海舟が何回か述べ、『徳川慶喜公伝』にも示唆されているから専門家には周知のことらしいが、きちんと教えられた記憶がなく、手許の詳しい日本史年表には、出て来るのも来ないものもある。直接の当事者が極秘にし、栗本鋤雲さえ本当のことを語らないので容易に確認できなかったようだ。しかもそれが、蝦夷地・銅山を担保とする可能性を含んだとなると、当事者ことに勘定奉行小栗上野は売国奴と謗られることにもなり、真偽・実在性を巡って、近年でも歴史家間の論争が行なわれている⁵⁵⁾。

ところが神長倉は、既に1933年にかなり明快な把握を示していた。いわく、この借款交渉は慶応二年と慶応三年と、二回行なわれた。そこを噛み分けると筋がはっきりする。慶応二(1866)年には話が洩れたために幕府内部で反対意見が強くなったので一旦立ち消えになった。慶応三年には、モンブランの策謀によってパリ万博で幕府の名声が低下したので、フランス側から断って

きた。

神長倉は言う。借款による体制立直し構想が、慶喜側近の原市之進によることは勝も述べている。交渉はある程度進んでいた。小栗が勝に腹を打ち明けたと伝わる話の内容はこれだが、その基礎にはオリエンタル・バンクからの色よい返事があった⁵⁶⁾。ここで神長倉が紹介するのが、以下の手紙である⁵⁷⁾。

御勘定奉行小栗上野介台下へ

日本政府六百萬ドルラルの高を借用するを望まる、に付右期限を記せし当月廿日附の貴翰落手せしことを告ぐるの榮あり／最初の一分即ち百万ドルは此銀行に係はず全く別段の取扱を経るものとして是は日本政府の都合次第余と速に取極むることを得べし 当銀行え金高の形として引渡さる、銅の価を定むることは可成注意して日本政府の益を斗り取扱ふへし五万ドルラルの方之期限は当銀行及びソシエテゼネラル之参考を経れば当地ニある双方の代人より各其本店に申送るべしオリエンタルバンクコオペレーション代人として余は此事を英国へ趣くべき第一之郵船を以て当銀行の本店え申遣はし総轄公司えも申立べし此銀行に係る以上新に仕組む諸条件之可否を断するの任此者一人にあり右公司決断之趣余に申来り次第其許に通知すべし／右之件を余が本店へ申遣はす折を以て日本政府先前より此銀行と事を取扱ふことにおゐて常に快く且正実之処置ありしことを告げ其外總て日本之物産に富み政府之威力ありて依頼すへきとの事に付余信恩するの意を縷述するは余がために最可喜職掌なりと思へり。

代人 トルへ、トッド

神長倉はこれに対して、「五万ドルラル」は百の字が抜けたのであろう、ソシエテジェネラルの「参考」は「保証」の意味か、とコメントしている。いずれも適切である。問題は発信人の署名を尾佐竹に従ってトルヘトッドと読んでいることで、これは実は、オリエンタル銀行横浜支店の支店長代理ジョン・ロバートソンである⁵⁸⁾。また、文書が岸川家に伝わった由来を尾佐竹の紹介通りに語っているが、『小栗日記』⁵⁹⁾が公表された今日では、この由来に関する伝承が成立しないことも明らかである。文面解釈上の問題としては、この借款をオリエンタル・バンクとソシエテ・ジェネラル両行対等の共同融資のように解しているが、オリエンタルは横浜に支店を持つのに対して、貸し手の中心フランス側のソシエテ・ジェネラルは定置支店がない⁶⁰⁾ので、オリエンタルが交渉窓口になっていた面を考慮すべきであろう。

さてしかし、話が漏れたところから反対が強まったばかりか、慶喜の長州征伐自体も腰砕けになった。それでもなお借款交渉は続いた。モンブランの策動によってフランス側は、日本が幕府と薩摩の二政府状態になっていると解すようになり⁶¹⁾、栗本鋤雲の訪仏によっても覆水は盆に返らなかった⁶²⁾（つまり、慶応三年には幕府は、今日言うクレジット・ワージネスを失っていた）。だからこの借款は結局成立しなかった。こう整理されると、事態はかなりはっきり見えて来る。そうならなぜ歴史家達は、この説と無関係に事態の解釈を進めようとするのだろうか。無論神長倉説にも史料的補強がなお必要であるが、全く無視して済むものではあるまい。

そしてこの説が真実視されるようになると、徳川主導の郡県制構想の意味が改めて生きて来る。もとはロッシュの入れ智慧によるにせよ、これは明治政府の廃藩置県の先駆である。因に兵庫商社設立にしても明治政府の通商会社・為換会社の先駆である。開港ショックによって幕府は西欧的近代を急速に吸収しつつあった。そのことが倒幕を急がせた。となれば明治維新は、単に遅れた幕府を進んだ反幕勢力が打倒した変革だったと捉えれば済むか？

5. むすび—神長倉史観についていささか

神長倉真民がどこまで独自の歴史観を持っていたかまでは判らない。彼は『財界巡礼記』⁶³⁾の中で、当時流行のマルクス主義に対して、『資本論』25章の植民地論はウェークフィールドを下敷きにしていないとか、時代に合わなくなったのでベルンシュタインの修正主義が現れたとか、カウツキーが『剰余価値学説史』の編者序文で、マルクスが諸経済学者にあまりにきつい罵言を投じているので和らげたと書いている⁶⁴⁾とか、結構高級な知識、仮にマルクス批判家からの受け売りだったとしても、滅多に注目されない水準の知識をひけらかしていた。その知識は、マルクスが行なったイギリス分析は正しいにしても、時代と国民性の異なる日本にそのまま持つては来られない、と主張するためのものだった。これは当時ありふれた思想善導型の論法で、ここから彼は皇国史観への傾斜を強めていったらしい⁶⁵⁾のだが、注意すべきは、彼は本質的に思想家ではなくジャーナリストだったことである。だから、身を賭して特定の立場に節を守ったりはせず、時局の流行思想を時には先取りし、時には適宜追随して便乗していたのである。

だがここで言う歴史観とは、さほど深刻なものではなく、神長倉の歴史叙述に現れたいくつかの傾向と特徴といったほどのものである。それは彼の驚くべき博覧強記と溢れるばかりの筆力とによって、時に端的な放言の形をとり、時として史料批判になり、時として或る種の人物に対する好悪の表現になり、また歴史解釈における方向性にもなる。それらを括れば、強靱な在野史観とでもなろうか。

神長倉は、小栗上野介には深く同情しており、幕府を支えた努力を評価している。だが決して神格化はしない。小栗の功とされる、商社構想や迎撃戦略が、実はフランス人のアイディアに依拠していたと指摘し、小栗が担った幕末財政にも特に手品があったわけではないと結局突っぱねる。ともすれば小栗を神格化したがる蜷川新に対しては、行過ぎかと思えるほどの批判を浴びせる。

他方、勝海舟に対しては、史料を残したことを評価もするが批判が多く、それは専ら、勝の手記類が史料として歪んでいる点に集中する。資料としての内部矛盾を衝く類の批判と、客観性を歪めてしまった勝の人物に対する批判とが同居し、さらに、勝史料の批判を通じて、それに無批判に依存する、通常の幕末史理解に対する批判にも及ぶ。このあたり、神長倉は一筋縄で済まないところを示している。

勝の史料に対する批判は、結局「勝てば官軍」史観に対する批判である⁶⁶⁾。御家人から出世

して若年寄にまでなった勝海舟は、幕府瓦壊を促進しつつ生き残り、枢密院顧問になり伯爵に叙せられ教育勅語奉答の歌まで作った。その生き残りが、手記回想と保持史料ばかりか晩年の歴史著作によって、有力な史料源になった。それを素材とする幕末史解釈が、幕府になお残されたいくつかの可能性を無視して、国内中心主義的維新万歳史観、敗者切捨て御免の自国権力賛美史観に落ち着くのは自然である。実際、勝の日記に、幕府内で対立したフランス派に対する一括した貶め、単なる悪罵を越えた、憎悪に近い貶め⁶⁷⁾はあっても、フランスに縋ってでも自由貿易帝国主義に対峙しようとした幕府内開明派の自立志向への理解はない。神長倉の勝史料批判は、本人がどこまで意識していたかは別として、論理的に押しつめれば、天皇を看板とした薩長勢力に代わって、幕府の手による日本近代化があり得たのではないかというところまで行くのである。それを空しい思弁と言い放ってしまえば、それこそ勝てば官軍史観である。神長倉はこれに対して、もし徳川慶喜がこう振舞っていれば、とか、もし榎本が軍艦をこちらに向けていればとか、かなり細かい状況にまで立ち入って、幕府が勝ち得た可能性が決して低くなかったことを示そうと試みている。一步間違えば通俗読物に墮す危険があるが、神長倉の史料探索は通俗化を防いでいる。

問題はなぜ神長倉がかような歴史眼を獲得したかである。一般形で言えば在野型批判精神であろう。もともと彼には、不徹底ながら藩閥政治へ反感があった。それは案外出自に由来するものだったかも知れない。神長倉という珍しい姓の家は、福島県浪江町を中心に浜通にはいくらか存在する。となれば神長倉真民は直接その出身か縁者か、いずれにせよ旧相馬藩に繋がり得る。彼が薩長権力に抑圧ないし疎外された側の心性を持っていても不思議はない。それがかえって幕末史をヨリ彫り深く捉えさせる原因になったであろう。しかし出身地説は事実未確定のままの仮説に過ぎない。もうすこしはっきりしているのは、神長倉がマルクス主義批判や皇国史観への傾斜を見せながら、同時にもったいぶった学者への批判⁶⁸⁾を隠さないことである。彼にとっては、マルクス主義と学者が極めて近い存在だったように観える。それが文体批判にまでなる⁶⁹⁾。在野的批判精神と括ったのはそのためである。

神長倉真民は根本のところ解らない著作者である。しかし恐るべき腕力を持つ野人型の著作者であり歴史家であることは、読めばすぐ解る。解らないのは、学界歴史家達が、なぜここまでこの在野史家を無視し続けたかである。

註

- 1) 馬場宏二『会社という言葉』2001年、大東文化大学経営研究所。なお本稿は、同書を補うべき、馬場宏二「補説『会社という言葉』」大東文化大学『経営論集』5号、2003年2月、馬場宏二「ロバートソンの署名」同誌10号、2005年9月に続く三番目の補説である。
- 2) 馬場宏二『マルクス経済学の活き方』2003年、御茶ノ水書房、第9章「続『国富論』から三題」、第10章「『武士道』と『資本論』」、第11章「新渡戸稲造の『資本論』」および付論D「お札の三人と『資本論』」
- 3) 前掲『会社という言葉』第二章、馬場宏二「福沢諭吉における“会社”」『福沢手帖』第119号、2001年9月

- 4) 三谷太一郎「幕末政治家栗本鋤雲とその維新後」“UP” 336号, 2000年10月
- 5) 兵頭徹「幕末開港後における長崎奉行の性格」「洋銀引替と長崎奉行岡部長常」「洋銀引替継続と長崎奉行」, 大東文化大学『東洋研究』, 145, 149, 154, 2002年11月, 2003年11月, 2004年12月
- 6) 『ニコニコ』, 啓蒙的大衆雑誌, 東京大学明治文庫所蔵, 欠号があり, 神長倉稿の正確な初出年は判らない。
- 7) 『義勇青年』, 東京大学明治文庫に第一巻第一号大正4年10月と第二巻第三号大正5年3月のみがある。
- 8) 『ダイヤモンド25年史』巻末年表による。
- 9) 室原地区にこの姓が数戸ある。それ以上には今のところ判らない。浪江町役場調べ。
- 10) 神長倉の著書に早稲田実業学校の出版物を含み, 天野為之が同校の校長を勤めているので, 直接に問い合わせてみた。同校後藤浩一氏によれば, 戦災のため記録が不完全だが, 神長倉真民の名は明治36年の成績表にあり, 明治37年に卒業したものとみられる。そこから彼は1887年頃の生まれと推測できる。
- 11) 『新訂増補日本著名人名辞典』2002年, 日外アソシエーツ
- 12) 「万華鏡」1～6『ダイヤモンド』昭和十年一月十一日～三月一日
- 13) 「万華鏡」『ダイヤモンド』昭和十年三月十一日
- 14) 『ダイヤモンド』昭和十年八月一日～九月二十一日
- 15) 『ダイヤモンド』昭和十年八月一日
- 16) 石井孝『明治維新の国際的環境』1957年, 吉川弘文館, 547～8ページ, 同増補改定版, 1966, 1973年, 675ページ: 金井円「小栗忠順の対英仏借款に関する岸川家伝来文書の再評価」, 徳川林政史研究所『研究紀要』昭和45年度
- 17) 立脇和夫『在日外国銀行史』1987年, 日本評論社, および同『明治政府と英国東洋銀行』1992年, 中公新書で, 神長倉『明治維新財政経済史考』を引用している。前著では岸川家文書第3号, 塩田三郎訳の手紙も引用されている。
- 18) 『ダイヤモンド』昭和十年八月一日
- 19) 財政学者林健久氏が『明治維新財政経済史』を読んだ記憶があるとのこと。
- 20) 取り敢えず以下の文献を検討したが, 神長倉の著作は, そのいずれでも引用されていなかった。大山敷太郎『幕末財政金融史論』1969年, ミネルヴァ書房: 三谷博『明治維新とナショナリズム』1997年, 山川出版: 宮地正人『幕末維新の社会的政治史研究』1999年, 岩波書店: 石井寛治, 原朗, 武田晴人編『日本経済史 幕末維新时期』2000年, 東京大学出版会, 第一章(石井寛治): 井上勝生『開国と幕末変革』2002年, 講談社, 日本の歴史18。
- 21) 『ダイヤモンド』昭和八年二月二十一日
- 22) 同誌 三月一日, 四月一日
- 23) 尾佐竹猛『幕末遣外使節物語』1929年, 萬里書房
- 24) 『ダイヤモンド』昭和八年十一月二十一日
- 25) 同上
- 26) 『ダイヤモンド』昭和八年二月一日
- 27) 吉田東伍『維新史八講』1910年, 富山房, 228～230ページ
- 28) 尾佐竹猛『国際法より観たる幕末外交物語』1926年, 文化生活研究会, 280～282ページ
- 29) 金井円は神長倉について「外交関係の国内史料をひろく漁って, …通俗的な形式をとりつつも鋭

- い批判と解釈を試みた」と特徴づけている。金井前掲論文, 389ページ
- 30) 『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』20~23ページ
 - 31) 『ダイヤモンド』昭和八年三月一日~四月二十一日。神長倉はモンブランのお政, ロセスのお富, カシヨンのメリンスお梶, プレアンのお倉などの経歴容貌性格などについて蘊蓄を傾けている。因に神長倉は, ロッシュ, カシオン, モンブラン, ブリュエネ等の後日談にまで言及している。
 - 32) 『ダイヤモンド』昭和八年九月十一日
 - 33) 『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』48ページ。神長倉のこの知識は, 三田村鳶魚『江戸生活のうらおもて』1930年, 民友社8ページの「幕府の財政書類全部は, 慶応四年に新政府へ引継ぐことを避けて, 本所の御竹蔵へ持ち出して焼いてしまったから, 今日に伝わったものは何もない」に由来すると思われる。
 - 34) 神長倉同上書, 同上ページ
 - 35) 参照, 『小栗日記』, 発掘者本多夏彦(理一)による調査書ならびに「あとがき」(群馬県文化事業振興会『群馬県史料集第七巻』1972年所収)
 - 36) 現在なら, 大山敷太郎前掲書および石井寛治前掲『日本経済史』第一章である程度知り得る。
 - 37) 『ダイヤモンド』昭和八年三月一日等。この名のフランス人が来函したことはない由。函館日仏協会副会長若山直氏の調査による。
 - 38) 管野和太郎『日本会社企業発生史の研究』1931年, 岩波書店
 - 39) 同上書, 34ページ
 - 40) 蛭川新『維新前後の政争と小栗上野介の死』1928年, 日本書院, 『続維新前後の政争と小栗上野介の死』1931年, 日本書院。いずれも急速に版を重ねているから, 出版当時小栗ブームがあったのかも知れない。蛭川は戦後『開国の先駆者小栗上野介』1953年, 千代田書院を出しているが, 中身は何も加わっていない。
 - 41) 訪米同行者の記録でも, 森田清行が, 鉄道建設における共同出資を辛うじて掴んだ文を残している程度である。『萬延元年遣米使節史料集成』1961年, 風間書房, 第一巻, 77ページ
 - 42) 参照, 前掲馬場『会社という言葉』129~141ページ
 - 43) 石井孝が「フランスの会社と関係をもつべき日本の商業=航海大会社」と述べたのはこれであろう。岩波新書『明治維新の舞台裏第二版』131ページ
 - 44) イギリス公使は, 兵庫商社参加者についても氏名を知らせると要求した。『通信全覧』類輯之部十七, 352ページ, 馬場前掲『会社という言葉』155ページ
 - 45) 金井円, 前掲「小栗忠順の対英仏借款に関する岸川家文書の再評価」
 - 46) 神長倉真民『明治産業発生史』151ページ。因に同書第一章は, 『ダイヤモンド』昭和九年一月十一日~四月一日に10回連載した「コンペニー(商社)由来断」を纏めたものだが, 幕府の商社ばかりか, 在日外国商社, 坂本竜馬の亀山社中や陸奥宗光の著作, 薩州商社, 福沢の「商人会社」と網羅的に言及し, 管野『日本会社企業発生史の研究』を黙殺したままでそれを乗り越える業績になっている。戦後の坂本藤良『幕末維新の経済人』1984年, 中公新書: 『小栗上野介の生涯』1987年, 講談社の商社起源論の水準は, この神長倉には及ばない。
 - 47) 石井孝は著作のたびに認識を深め, 全体としてこうした商社発生論に至る方向を示していたが, 初めから神長倉のように単刀直入に捉えてはいなかった。
 - 48) 大塚武松編『川勝家文書』1930年, 日本史籍協会, 328~331ページ。因に大塚は, 1931年にはこの上申書の存在を掴んでいない。参照, 『龍門雑誌』51号, 41~3ページ。神長倉が編者大塚より

先に上申書の意味を明示した可能性がある。

- 49) フランスでは絶対王政時代に設立された *compagnie* は国家機関的性格が強く、革命後その特権性が嫌われて、ナポレオン法典下では新設会社は *société* と称することになったが、そこで株式合資会社は自由設立なのに株式会社設立は強度の免許制度下に置かれた (1867年会社法で改正)。だからフランス人が株式会社を国家機関に近いものと観念することは不思議ではない。だがヨーロッパ各国が皆国家間貿易機関を備えていたとは考え難い。
- 50) 馬場前掲『会社という言葉』132ページ
- 51) 「製鉄所約定書」『横須賀海軍船廠史』第一巻 (明治文献資料刊行会『明治前期産業発達史資料』別冊(8)Ⅲ) 所収, 同書, 20ページ
- 52) 神長倉『明治産業発生史』154~156ページ
- 53) 神長倉『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』238ページ
- 54) 『ダイヤモンド』昭和九年一月十一日で芋作は「組合商法伺書」発見の喜びを語っている。「愚痴をいふやうだが吾々のやうな「街頭の歴史家」には、富豪の建ててくれた研究室もなければ、値段お構ひなしで史料を買ひ込む財源があるわけぢゃなし、鶴嘴一ツで山へ入って行く冒険家のやうな気持ちで、街頭に史料を漁っているのだから、かういふ史料を発見した時には、全く冒険家が金鉱でも掘り当てた時のやうな法悦に打たれる」。
- 55) 高村直助『再発見日本の経済』1995年, 塙書房, 33~39ページは、直接には芝原拓司『開国』1975年の資料読解に対する批判であるが、それは幕末における植民地化の危険の存否を射程に置いている。
- 56) 『ダイヤモンド』昭和八年十二月十二日
- 57) 松本市教育委員会所蔵「岸川家文書第3号」1866年9月28日付, 塩田三郎訳。神長倉はこれを尾佐竹前掲『国際法より観たる幕末外交物語』440~441ページから引用した。石井孝前掲『増補明治維新の国際的環境』674ページの引用も同じ出処だが、同書1973年版は金井円前掲論文の判読を掲げている。大差はない。
- 58) 参照, 馬場宏二前掲「ロバートソンの署名」
- 59) 上掲(35)参照
- 60) 立脇和夫前掲『在日外国銀行史』334~335ページ
- 61) 『ダイヤモンド』四月十一日~二十一日
- 62) 栗本の側からみれば、フランス財界は国家主導なので英米に比べて力が弱い, となる。「暁窗追録」『匏菴遺稿一』1975年, 東京大学出版会, 65ページ。参照, 馬場前掲『会社という言葉』167ページ
- 63) 神長倉真民『財界巡礼記』70, 172, 174ページ
- 64) カウツキーは確かにこういう趣旨を述べている。「マルクス自身がそれを公表しなかったであらうと私が想定し得るやうな無駄げな言葉使ひ (例へば若干の経済学者を犬, 無頼漢, 悪賢い糞つ脱れと呼び, 国家の役人を国家的尾籠漢と呼んだ等) を私が除去し」森戸辰男訳『剰余価値学説史』大原社研パンフレット No. 19, 1928年, 31ページ。だが神長倉は、果たしてこれを実際に読んだのだろうか?
- 65) ここからさらに「万華鏡」の天皇機関説攻撃, 『明治維新財政経済史考』「序文」の日本特別国視と続く。
- 66) 『ダイヤモンド』昭和八年二月二十一日にいわく、「近頃は、裏の裏のまたその裏の材料が出て来て、従来の勝った者本位の歴史陣鉦陣太鼓本位の歴史が根本から覆されて、本当の人間社会の歴史

が、つまり真の歴史が解かるやうになった来た…ことは、我々読書人にとってはまことに感興の深いこと…。勝った者本位史観批判は、他の場所でも繰り返される。

- 67) 慶応四年二月朔日の日記にいわく、「…時之権威あるは司農に小栗上野介、小野友五郎。此党数人、皆是等に雷同。其因て来る所、其謂れ無きにあらず。弘朗西公使并教法師カシオンと云者、能く官吏之情態に塾せり。爰を以て、栗本安芸の徒、尊信して其説に酔ふ。甚敷は、近々一兩年要路に当る者、皆弘郎西に倭せざれば、朝に立能はず。陰に党あり、結びて以て相固む。其説に云「長州、薩州は、後幕府に害あり、必ず是を滅せずんば害あらむ。我弘朗西に頼らば、軍艦、武器及び金幣といへども、送り来たして支ゆべからずママ」と。此故を以て、小吏其説を突とし、其毒に酔ふ、亦醒むる者なし。英吉利人は是を知て密に是党を悪む。是説を成す者は、水野癡雲、小栗上野、糟屋筑後、大小監察、陸軍の士官等、大言して算なく、空議因循、亦如何せむ哉」(講談社版『勝海舟全集1』幕末日記、19~20ページ)。ちなみにこれが、幕軍が慶喜に置き去りにされ鳥羽伏見の戦いに敗北して江戸に逃げ帰り、小栗は慶喜に罷免され、勝自身は陸軍総裁・若年寄に任ぜられて、既に勢力争いの帰趨決した後の心境である。問わず語りに自らイギリス党の徒であることも述べている。
- 68) 「近頃社会主義経済学の方のさる大博士と、それから、ちっとばかり偉くない哲学の方の先生とが、弁証法のことで大喧嘩をやりましたが」…「先日もある坊さんの、坊さんといっても、何やら大学の教授といふ偉いひとなんですが…事実の真相を知らないのは、説教している坊さんその人なんだから笑はせる」『財界巡礼記』168ページ、175ページ
- 69) 「近頃は、明治維新史や維新経済史の研究がだいぶ流行のやうだが、多くは例の唯物史観とかいふやつで、魚でも料理するやうに、いきなり、封建制度がどうしたの、資本主義経済がどうだのと、ずだずだに切りこまざいてるが、あれじゃ御当人には解かっても、読む方には嘔と腑に落ちない。第一その文章からして大変だ。[だが、それはその本質に於て旧封建的生産関係に対して、資本家的生産関係の支配的展開への、従ってまた、旧封建的支配者に対して、資本家及び資本家的地主の支配権確立への端緒を形成したところの、画期的社会変革であった]と来るのだが、どうだお解りかな」『ダイヤモンド』昭和八年六月二十一日。マルクス経済学育ちの筆者也、この文体揶揄には共鳴する。

2005年10月6日~11月10日